

もくじ

新収蔵資料 小正月の道具… P1 歴史地理案内①江戸時代に築かれた土手と風景… P3 お化け煙突 60年⑧… P4

足立史談

第670号

2023年12月15日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集局
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562



【写真1】ケエバシラ
(35～41cm)

新収蔵資料

小正月の道具—ケエバシラとケズリカケ—

間所 瑛史

この度、郷土博物館に品川区に住む佐藤高氏から、足立区の年中行事にかかわる資料を御寄贈いただきました。

佐藤氏は昭和一四（一九三九）年生まれで、大学卒業後に伝統芸能や年中行事の保存や記録、保護などに携わり、品川区文化財保護審議会委員などを歴任されました。主著に『ふるさと東京「江戸風物誌」』（朝文社、一九九五年）などがある方です。

佐藤氏は東京都で伝承されてきた年中行事が廃れることを憂えて昭和四十三（一九六八）年から調査をはじめました。自ら行事を行っている家々を訪ね、聞き書きや写真の撮影をおこないました。調査した範囲は東京二十三区と多摩地区の二十七市、四町、一村に及び（平成の大合併前）、訪問した農家の数は二百軒以上になります（注一）『ふるさと東京』民俗歳事記』より。

調査の成果は『ふるさと東京』民俗歳事記』（朝文社、一九九二年）として刊行されました。この本は東京都内で一年に行われる行事を豊富な写真とともに解説するもので、現在では行われていないような行事も記録されています。今回寄贈された資料は、取材調査の過程で入手した資料と行事の様子を撮影された写真など、いずれも現在では収集することができない貴重なものです。今回は

御寄贈いただいた資料のうち小正月の道具を紹介いたします。

■小正月とは 小正月とは一月五日のことで、一月一日の大正月に対して小正月と呼ばれます。この日には一年の豊作などを願って多くの行事が行われます。それらのうち、あらかじめ豊作であることや、手順や作業が滞りなく行われる様子を模擬的に、五穀豊穡などを願う行事のことを総称して予祝行事と呼びます。

小正月の際には柳やヌルデの木を材料にして儀礼に用いる道具が作られます。このことをモノツクリと呼びます。

■ケエバシラ ケエバシラとは粥柱の意味で、他の地域では粥かき棒や粥杖とも呼ばれます。柳でできた箸を使う地域もあります【写真1】。

小正月の行事に粥占（かゆうら）があります。粥占とは小豆粥を炊き、そこに粥かき棒や竹筒を挿し込んでかき混ぜ、先についた米の粒などから一年の収穫などを占う行事です。小豆粥は、小豆の赤い色に魔除けの意味があり、無病息災を願って小正月に作られる料理です。また、この日に女性の腰や尻を叩くと子宝に恵まれるとされています。

清少納言の書いた『枕草子』の第二段には、一月一日に女房たちが「粥の木」を持って尻を叩き合うさまが記されており、平安時代の宮中で

も粥の木という似た道具が使われていたことがわかります。

小正月の時には「成り木責め」と呼ばれる行事が行われる地域もあります。成り木責めは柿などの果樹の幹に刃物で傷を付けた棒で叩くなどして「成らねば切るぞ」と一人が威し文句を唱えると、もう一人が「成ります成ります」と言う儀礼で、実がたくさんなることを祈ります。このときに幹を叩く棒として粥かき棒が使われたり、幹につけた傷に小豆粥を塗ったりする地域もあります。

このように、粥かき棒は豊作や子を授ける呪力を持つ道具として使われたのです。

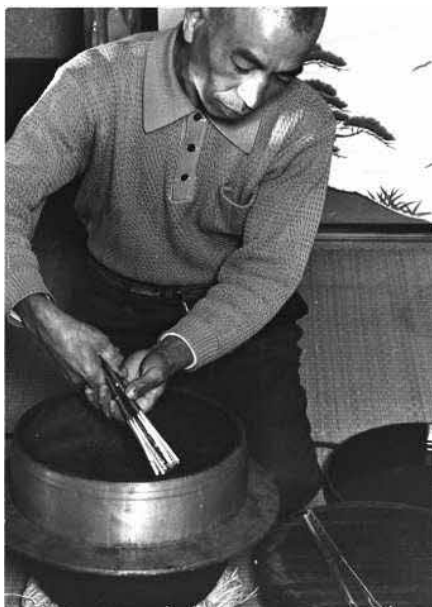
寄贈されたケエバシラはニワトコ製で、長さは三五〜四一センチメートルです。持ち手となる部分以外は皮が剥かれ、深く切りこみが入って

います。切りこみが入ることで、粥を掻き混ぜた時により米が付きやすくなっています。

佐藤氏が取材した花畑の家では、ケエバシラを小豆粥の中に入れて、粥がたくさんつくとも米がよく穫れると言われたそうです。佐藤氏が撮影した写真【写真2】からわかるように、男性が釜の中にある粥にケエバシラをまとめて入れて掻き回しています。また、粥を炊く時に四〜五寸(約一二〜一五センチメートル)に切ったヨシの茎を入れ、炊きあがった時に茎に入った粥の量によって吉凶を占う家もあったそうです(注一に同じ)。粥をかきまぜたケエバシラは神棚や田んぼの水口などに供えられました。

■ケズリカケ ケズリカケ(削り掛け)とは柳やヌルデなどの木を薄く削って作られた道具で、繭玉などとともに神棚などに供えられます。

繭玉とは養蚕の成功を祈って作られる、繭の形をした米粉の団子です。足立区では四角形の目玉団子が作られて神棚や大黒柱に飾られました(東京都足立区編『足立の今昔』一九七九年ほか)。繭玉という言葉がなまって目玉になったと考えら



【写真2】花畑での粥占(佐藤高氏撮影)

れます。

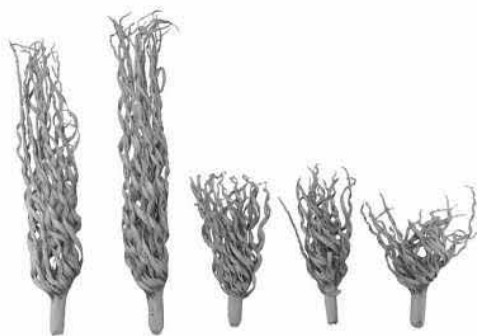
寄贈されたケズリカケは、当時江戸川区でケズリカケを販売していた八百屋の人に佐藤氏が依頼して作ってもらったものです【写真3】。佐藤氏の調査情報によると、綾瀬のある家では、江戸川からケズリカケを売りに来る人がおり、その人から購入したケズリカケを目玉団子と一緒に柳の木に飾ったそうです。

ケズリカケなどの小正月の道具は農家で自作するものでした。佐藤氏も前述の著作の中で触れています。江戸時代後期に記された『守貞漫稿』という風俗誌には、今は自らケズリカケを作ることなく売りに来る人がいることが記されており、その頃には既に製作販売する人がいたことがうかがえます。

画家の伊藤晴雨も「けづりかけやアー、けづりかけエ」と言いながらケズリカケを売り歩く人を描いて

おり、販売の様子がわかります【図1】。小正月の道具はその年に一回きりしか使用されない消耗品のため、なかなか後世には残りづらく、貴重なものです。佐藤氏の調査情報とともに博物館で大切に活用させていただきます。

(郷土博物館専門員)



【写真3】ケズリカケ(8~21cm)



【図1】『江戸と東京 風俗野史 四巻』城北書院、1930年(国立国会図書館デジタルコレクション)

歴史地理案内①

江戸時代に築かれた土手と風景

郷土博物館

足立区は四方を川に囲まれ、広々とした平野部にあることが特徴です。今回から、足立の歴史地理についての記事を連載していきます。

置―墨堤通りと旧綾瀬川が交差する地点―に架かっています。

ご注目頂きたいのは土手で、ジグザグと画面下部から綾瀬橋に向かって伸びています。ご覧の通り、江戸時代の土手は、決して大規模ではなく、人の身長と同じくらいでした。(一、五〜一・八m)程でした。いと比べると小規模であることに驚きます。

■堤の外の町や村 土手は土を盛り上げて造られています。現在の隅田川―当時は荒川―沿岸では川から少し内陸部に土手が築かれました。堤防と川の間は「堤外」と称され、

一般的に堤外耕地という地字名が用いられました。

村や町がまるまる堤防の外だった例もありました。千住河原町と千住橋戸町は、千住にあった二重の堤防―熊谷堤と掃部堤―の外側でしたし、宮城村や小台村も本村部分は同じく熊谷堤(荒川堤防)の外側に位置していました。いまから考えると、かなり不思議な光景ですが、これらの町や村の屋敷地があるところは微高地(小高い場所。一〜二mほど)にありました。冠水の危険性が比較的少なかったところですから、なにより堤防自体が二mもないのですから堤防と同じ高さであれば、土手の外側でも内側でも変わりがありませんでした。

■洪水の影響 寛保二(一七四二)年八月、関東では大雨が続き、葛西領(葛飾区・江戸川区)から浅草まで水没した大水害がおきました。隅田川や綾瀬川の土手も切れたと記録されています(『武江年表』等)。



図1 江戸期の千住曙町あたりの土手

水害との関係は未詳ですが、鹿浜村の宝蔵寺は、この年に堤外から現在地(現鹿浜三丁目)に移転しており、本木村の吉祥院

の山門もこの年の建立です。

水害二ヶ月後の十月になり、幕府は中川や綾瀬川など各地の堤防について、肥後熊本藩主・細川宗孝に修復を命じて堤防の復旧が計られました(『御触書寛保集成』)。現在、区の東部をながれる中川の土手も、かつては、その一部が元となったと推定されます。

現在は、近代以降の堤防工事が続けられ、昔とは変わり土手の規模も安全性も飛躍的に高まっています。土手は変化しましたが、足立区の風景を代表する対象の一つであることに変わりはありません。



図2 幕府が肥後熊本藩に修復を命じた中川土手の現状

お化け煙突60年 ⑧

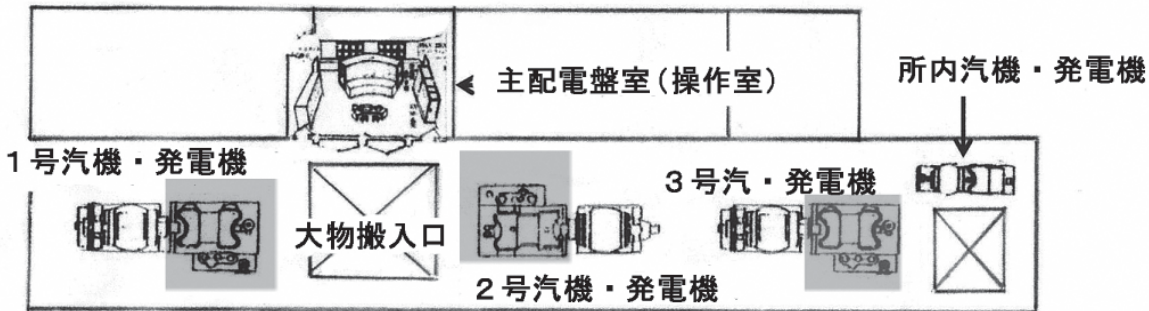
設備と操作員 ②
格和宏典

■タービン(汽機) タービンとは、蒸気または水などを吹き付けて周囲の羽根に受けて回転する原動機のことを言いますが、発電所本館には、米国のウエスチング・ハウス社製多段膨張並行流動タービンが軸方向に3機並び、1号と2号は汽機が、2号機と3号機は発電機が向かい合わせになっています。(図1参照)

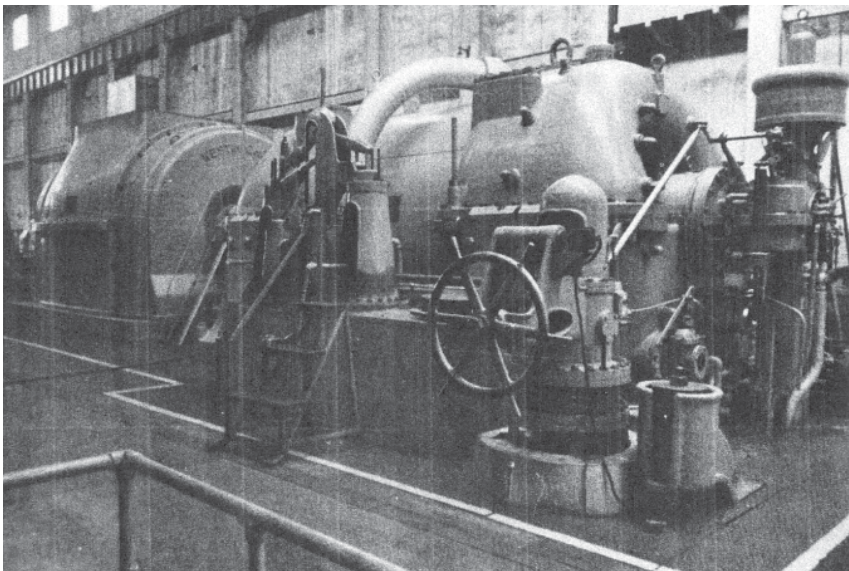
蒸気圧力は15.3 kg/cm²、蒸気温度は314℃、回転数は1500 rpmで、大正期の最新技術が詰め込まれたものでした。

写真の大きな丸い操作ハンドルはスロットル弁(主蒸気止め弁)で、同期生によると、「一階にあるスチームレシーバーからタービンへの蒸気管の最初のメインバルブで、大きな回転ハンドルを3〜4人で力を合わせて開けた。」とのこと。これはタービン始動前の暖気と運転に欠かせない作業でした。

タービン作業員は、主機と補機担当に分かれており、本館2階のタービンを主機(しゅき)といいベテランが運転操作を担当し、主機の機能を發揮させるための補助機器(補機)は1階に設置され、若手が担当していました。



【図1】 汽機(タービン)・発電機の並び (色かけしたものが汽機)
2号・3号は汽機が、2号・3号機は発電機が向かいあいとなる。



2号タービン(右)と発電機(左)

主機3台を統括制御する部屋はなく、すべて手作業でした。そして、運転を監視するための計器盤が各主機の壁側に取り付けられており、担当は計器盤とにらめっこしつつ主機に戻っては操作を行っていました。タービン・発電機室は轟音で満ち溢れていましたから、2階の主機(タービン)担当が大物搬入口1階の補機担当への指示を大声で怒鳴ってもよく聞き取れないことがしばしば

あり、紙ばさみを吊るし、指示書を挟んで上げ下げしたりしていました。が、晩年近い昭和36年頃に伝声管が取り付けられました。船のエンジン室に向け、航海士などが筒状のものに向かって怒鳴っている映画シーンがありますが、それを伝声管といい、一定の効果はあったようですが、鉛筆や消しゴムに指示書を巻き付け輪ゴムで止め階下に落とし伝達することもあったようです。とにかくアナログ一色の職場でした。

■蒸気使用量 おおよそ1kwh(註)あたり、5.5kgを消費しました。発電量は設備の老朽化と相まって1台22000kwが限界だったので、5.5kg×22000kw×3台=363tとなりますが、毎時363tの蒸気を放出すれば水はいくらあっても足りません。当然蒸気を温水に戻して再利用することが必要であり、復水器が必要だったのです。

(註) 1kwh(キロワットアワー)：1kwの電力を1時間使用した場合の電力量単位。
(元千住火力発電所所員) つづく